『JSPHCS/BMKK がん薬物療法海外研修』報告書

名古屋市立大学病院　薬剤部　黒田　純子

この度、平成 23 年度 JSPHCS/BMKK がん薬物療法海外研修として、平成 22 年 6 月 3 日から約 10 日間の日程で、ASCO への参加とミシガン大学病院での研修を行いました。その報告をさせていただきます。

１．2011 ASCO Annual Meeting　への参加

１）巨大化したＡＳＣＯの要因と背景

第 47 回米国臨床腫瘍学会（ASCO）は、米国の北寄りのほぼ中央に位置するイリノイ州シカゴで開催された。学会は 1964 年に 22 名の会員で発足した。そのポリシーは「国籍を問わず門戸を開き、制限を設けずにすべての会員に特典を付与した」ということで、47 年後の 2011 年には総会員数は約 3 万人に増加した。ASCO がこれだけ巨大化した背景には、がんの病理や研究に注目するのみでなく、設立当初から「がんの臨床と患者のケア」を重視していたことに着目される。学会のプログラムは「教育プログラム」、「医療者支援」、「全般的情報提供」など様々な内容が準備されている。それらのプログラムはウエブ上で公開され、確認することができる。情報量の多さと、対象とする領域の幅広さ、そして質の高さ、充実したサービスが巨大な組織へと導いたのだと理解できた。また実際参加をして感じたのは、そのホスピタリティの高さであった。会場が非常に広く、プログラムの数が多数あり、そして大変多くの人が参加する状況の中で、参

加者が迷うことなく、かつ滞ることなく快適に学会を過ごせるための様々な工夫が行われていた。携帯端末への情報の提供、数多くのインフォメーション係（彼らは“立っているだけ”ではなく、笑顔で常に参加者に向けて、「私はあなたの役に立つわ」といった“姿勢”を示していた)、Daily News の配布、水、コップ、水を入れるボトル、インターネットの配信、携帯端末の充電の提供および会場に到るまでのシャトルバスサービスなど細かな所まで配慮が行き届いていた。これだけ多くの参加者がいるにも関わらず、”列に並んだ“のは初日の ASCO バッグを受け取る際とシャトルバスに乗る際のほんの数分であったことは驚きである。

２）生活習慣とがん

教育講演、「Role of Nutrition, Supplements, and Integrative Medicine in Cancer Prevention, Treatment, and Survivorship」に参加した。これはライフスタイルや食事内容ががん予防においてどのような影響があるのかといった内容であった。そのポイントは、①食事（内容と量)、②運動、③アルコール　である。

これらをスコア化して、がんリスクあるいは、がん治療中の場合には再発リスク等への影響を示していた。

『リスクメーター』の表と裏

研究機関として、American　Cancer Society　(ACS)、American Institute of Cancer Research(AICR)、U.S.　Department of Health And Human Service　などがその指針を出している。例えば、ACS からは過体重は、乳癌、大腸癌、食道癌、腎

癌になる危険性と関連しとの報告があった。反対に、やせ過ぎていることや、体重の減少はある種のがんに罹患しやすくなる報告もあった。体格の指標としてはBMIを用いている。このような血液や細胞といったレベルでなく日常臨床から得られるデータからがんの臨床への還元といった発想で臨床現場を見る視点を持つと、薬剤師による臨床研究の幅が広がるのではないかと考えた。

２．University of Michigan Hospital and Health Centers における研修

University of Michigan Health Systemは、ミシガン州のデトロイトからすこし東のアナーバーに位置する。University Hospital（600 床）、C.S. Mott Children's Hospital（206床）、Women's Hospital、UM Comprehensive Cancer Centerそして Cardiovascular Center などからなる医療機関である。全体で 950 床を有し、年間 43,000 人の入院患者数を数える。薬剤部には 255 人（Pharmacists103 人、Technicians/Support Staff129人、Residents10人、Managers/Supervisors13人）が所属する。研修は二日間行われ、講義とClinical Pharmacistの病棟ラウンドの同行および薬剤部の見学であった。今回の研修でもっとも興味深かったことは薬剤師の教育システムである。薬剤師は薬学部を卒業し Pharmacist となるが、1 年の研修を経て General Pharmacistに、さらに1年の研修を受けるとClinical Pharmacistになる。その後 2-3 年臨床経験を積んだ後に試験に合格すると専門薬剤師（Board certificated）に認定される。ただし、専門薬剤師を継続するには、学会参加等の単位を取得する、ASHP（American Society of Health- System Pharmacists）が最新情報をまとめた冊子の配布を毎年まとめるためそれへのレポート提出を行う、7 年に 1 度

の試験を受験するなどいずれかの義務があるとのことであった。また、General Pharmacist に対しても病院において研修プログラムが準備されており、その目標や責務について明確になっている。これらのことから教育システムが大変充実していることを感じた。より優れた薬剤師の育成を目指すためには、方向性を明確にし、内容を吟味した教育システムが不可欠と思われる。

３．おわりに

今回の研修において、ASCO では世界中の Oncologist によるがん治療のための最新情報に触れることができ、ミシガン大学病院ではアメリカにおける進んだ薬剤部の業務を見学することができた。日本の薬剤師は、優秀で大変多くの業務を行い医療に貢献していると思うが、アメリカのように業務を細分化して、各分野でのスペシャリストとして位置付けることができたならば、さらに深く活躍ができる可能性が多大にあると感じた。そして、そのような状況の中で臨床に基づく研究を行い、発信していくことが専門薬剤師として目指すべき姿ではないかと今回の研修を経験して考えた。

最後に、このような有意義な研修の機会を与えて頂きました日本医療薬学会会頭安原眞人先生はじめ、関係者の皆様に深甚なる謝意を表します。また、団長として同行いただきご指導を承りました鈴木洋史先生、研修をご一緒させていただいた岩本卓也先生、松田絹代先生に厚く御礼申し上げます。そして海外研修に快く送り出してくれた名古屋市立大学病院の皆様に深く感謝致します。